

交流と対話を通じた大学間の協同・連携を考える

～2007 年武漢大学徳島社会・文化体験研修～

Creating an international university network for human interchange

留学生センター 教授 Gehrtz 三隅友子

ABSTRACT

In spring 2006, 14 Japanese students led by instructors visited the Wuhan University in China. During this time we gathered information concerning a study tour to Japan. About hundred Chinese students submitted replies to our questionnaire. This study will show how the International Center tried to implement the results of this survey in planning and conducting a study tour to Japan for students from the Wuhan University in October 2007.

I will concentrate on the following three points.

1. How to deal with students, who are already learning Japanese and know something about Japanese culture or are deeply interested in Japan.
2. The use of the 22nd National Culture Festival, which was held at the same time in the Tokushima Prefecture, as an excellent opportunity to experience high-level cultural activities.
3. Make sure that the study tour does not degenerate into a mere sight-seeing by providing opportunities for the students to meet as many people as possible inside and outside the university.

All Chinese students kept daily records during their visit. This study will analyze and discuss these diaries together with comments and impressions given by the participants during their stay with special concentration on all activities which included also Japanese students. On this basis this study tries to find clues about the present state of interchange between universities and how to cooperate more effectively in the future.

はじめに

徳島大学留学生センターでは、2007 年 10 月 26 日から 11 月 5 日の間、武漢大学（本学との協定校）より 9 名の学生（引率教授 1 名）を招聘し、「武漢大学徳島社会・文化体験研修～まほろば武漢プロジェクト～」(注 1) を実施した。本研修プログラムは、2005 年 3 月の武漢大学訪問プログラム（注 2）にて得た学生 116 名（武漢大学日本語学科所属）のアンケート結果に基づいて企画し、実施した。特徴としては、①日本語力及び日本文化に対する知識を持つ学生に対応する（注 3） ②国民文化祭のイベントと同時期に実施する ③観光にとどまらず大学内外でのより多くの人との交流を図る、の三点が挙げられる。

特に「第 22 回国民文化祭・とくしま 2007」(注 4)（2007 年 10 月 27 日～11 月 4 日徳島県内にて開催）の中で、美馬市（徳島県西部の都市）との協力を得て、美馬市内の三つのイベントにボランティアスタッフとして参加し、当地でホームステイを体験した。こうして武漢大学の学生は美馬市の人々との交流をはじめ、高校生（城ノ内高校）、徳島大学学生との交流を行った。

本稿は、研修を終えた武漢大学の学生からのアンケート、及び研修中に書かれた日誌、さら

に交流の相手となった日本人からのコメント等を元に、まず研修全体を評価し、次に「交流」活動に焦点を当て、さらに短期研修における教育活動としての「交流」を考察するものである。

1. 研修の概要

1-1. 背景

武漢大学と本学の間には、これまで総合科学部を中心とした①研究者交流②中国人講師(共通教育の中国語教育を担当)③大学院及び学部レベルの交換留学(1名あるいは2名が1年間交換留学生として在籍)の協定校としての活動を行ってきた。2006年3月に初めて学部学生14名による8日間の訪問研修を実施した。参加者である本学学生から、武漢訪問及び学生との交流を通じたプラス評価(意義があった、またこのような体験をしたいという評価)を基にして、両大学間のより多くの人の交流を図るため2007年には、武漢大学から徳島大学への訪問を受け入れる短期研修を行うこととなった。

1-2. 目的

協定校同士の学生を中心に交流活動を行うこと、また短期の研修を実施するにあたって、本学と武漢大学の様々な連絡や事務手続きをより円滑に行えるように互いに連携・協力すること等が実際の目的であった。短期研修の学生受け入れに関しては初めてではなかった(注5)が、将来を考えた交流活動の礎とし、今回の実施を通して国際課、留学生センターそして総合科学部及び歯学部といった大学内の連携を図ることも含まれた。

さらに、独立行政法人化以降、徳島大学は自らの教育・研究活動が地域にどのように貢献しているかを常に念頭に置いている。この中で、教育活動の一つである本研修が大学と地域の連携及び協力によって成立させ、またその効果を両者が共に享受することも目的であった。

1-3. 参加者・関係者

○武漢大学

- ・武漢大学学生9名(詳細は表1)
- ・武漢大学日本語学科引率教員1名
- ・武漢大学日本語学科教員1名(中国語教員として1年間の招聘)1名

表1

	学部・学科	学年	日本への留学経験	日本語	男・女性
A	日本語学科	大学4年	有 長崎 2007 6ヶ月	○	F
B	日本語学科	大学4年	有 長崎 2004 6ヶ月	○	F
C	日本語学科	大学4年	有 2回(いずれも短期)	○	M
D	日本語学科	大学4年	有 長崎 2007 6ヶ月	○	F
E	日本語学科	大学院1年	無	○	M
F	日本語学科	大学院2年	有 (東京・大阪等旅行)	○	F
G	日本語学科	大学院2年	有 長崎 2004 6ヶ月	○	F
H	日本語学科	大学院2年	有 長崎 2004 6ヶ月	○	F
I	口腔医学(歯学)	大学院2年	無	英・中	F

○徳島大学(留学生センター)

- ・国際交流連携室・国際課・総合科学部(講義)・歯学部(研究室紹介)
- ・徳島大学学生22名(注6)(11月2日の交流会参加者)

- ### ○学外

- ## 2. 研修の日程

日	活動	(宿泊先)
10月26日(金)	武漢(中国国内経由)より 徳島へ到着 歓迎会	しんくら会館泊
10月27日(土)	午前:研修ガイダンス 午後:美馬市へ	ホームステイⅠ
10月28日(日)	「能楽の祭典」ボランティア(安楽寺能楽堂)	ホームステイⅠ
10月29日(月)	自由行動	ホームステイⅠ
10月30日(火)	徳島観光① (大塚製菓・鳴門公園・亀浦港・観潮船乗船)	市内泊
10月31日(水)	徳島観光② (パルトの楽園・雲山寺・阿波踊り会館)	しんくら会館泊
11月1日(木)	午前:総合科学部・歯学部訪問 午後:城ノ内高校訪問交流	しんくら会館泊
11月2日(金)	午前:日本人学生と交流 午後:大学祭に参加 美馬市へ	ホームステイⅡ
11月3日(土)	「吉野川探訪フェスティバル」ボランティア	ホームステイⅡ
11月4日(日)	「美馬映像フェスティバル」ボランティア →「国民文化祭閉会式」	しんくら会館泊
11月5日(月)	自由行動	市内泊
11月6日(火)	徳島発 武漢 帰途へ	

THE UNIVERSITY OF CHICAGO

研修目標

- は徳島県が主催県で様々な行事が10月27日から11月4日まで開催される)の徳島県美^み馬^{まし}市の

→ 観光ではなく、目的を持った研修であることを確認してください。

日本語を使い様々な活動を通して、生きた日本を体験してください！

☆歯学部の方は、英語と中国語で、そして五感を使って日本を体験してください。

2 できるだけたくさんの日本人と出会い、話し合い、者える。

- 51 -

- 3 これまでの自分と日本、そして日本語の関係を振り返り、これからの新しい関係を考えるきっかけを作る。

どうして日本語を勉強しようと、また、日本へ来たいと思ったのですか？

課題

- 1 事前に、自己紹介書を作成してください（添付の用紙に）。
- 2 研修中に毎日、写真を１枚にとって日誌を書きます。（感想・発見・疑問等を）
- 3 自己紹介書と毎日の記録を集めて、世界に一つの研修日誌を作成します。

<詳しい方法は来日後に説明します。>

主な活動

- 1 美馬市の国文祭イベント <http://www.city.mima.lg.jp/4/62/471/000716.html>
 - ① 能楽の祭典：10月28日（日）
 - ② 吉野川文化探訪フェスティバル 11月3日（土）
 - ③ 映像フェスティバル 11月4日（日）
- 2 徳島県国文祭 閉会式 11月4日
- 3 美馬市内でホームスティ
前半 10月27日～29日（3泊） 後半 11月2日～4日（2泊）
前半後半で別の家庭に、そして、二人が一家庭にお世話になります。
- 4 徳島・鳴門旅行 10月30日～31日 1泊2日
- 5 徳島大学学部訪問（城ノ内高校訪問） 11月1日（木）
日本語学科の学生 → 総合科学部へ 口腔科の学生 → 歯学部へ
- 6 徳島大学学生との交流会 11月2日（金）
グループディスカッション

事前準備

用意してほしいもの：

- ☆自己紹介書（添付用紙）メールにてお送りください
- ① ホームステイの家族への小さなおみやげ： 二家族分
 - ② 名刺に代わるもの： 30枚
名前（ひらがなの読み方）・連絡先（住所・電話・メール等）を書いたカード
 - ③ デジタルカメラ（二人で一台あれば大丈夫です）
 - ④ 自己紹介するのに必要なもの 家族の写真、趣味の道具、歌のテープ等
 - ⑤ 11月2日の準備（3枚目を見てください）＜いつも食べているお菓子！＞

お願い

今回の研修は、徳島大学留学生センターと美馬市が協力して実施する「異文化交流による地域活性化プロジェクト～まほろば国際プロジェクト～」の一部です。みなさんと日本人の交流を通して町興しを考えています。みなさんが多くの日本人と交流して、日本人へ刺激を与えてくださることを期待しています。短い間ですが、どうぞ自分の考えをしっかりと私達へ伝えてください。よろしくお聞いします。

徳島大学留学生センター

THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS

2-3. 交流活動概要 及び 日程

- ① ホームステイⅠ前半（美馬市寺町地区） 10月27日～29日 3泊4日
10月29日に自由行動の時間があり、家族単位でそれぞれ交流を行った。
- ② ホームステイⅡ 後半（美馬市脇町地区）11月2日～3日 2泊3日
二つのイベントのボランティアに参加のため、夜間のみ一を一緒に過ごす。
- ③ ボランティア活動（美馬市）
- ④ 高校生（城ノ内高校）
- ⑤ 大学生（徳島大学）

表3 交流活動日程

日	活動	(宿泊先)
10月26日(金)	徳島へ到着	
10月27日(土)		① ホームステイⅠ
10月28日(日)	「能楽の祭典」ボランティア活動③	
10月29日(月)	自由行動(ホームステイの家族と)	
10月30日(火)		
10月31日(水)		
11月1日(木)	午後:城ノ内高校訪問交流④	
11月2日(金)	午前:日本人学生と交流⑤	② ホームステイⅡ
11月3日(土)	「吉野川探訪フェスティバル」ボランティア活動③	
11月4日(日)	「美馬映像フェスティバル」ボランティア活動③	
11月5日(月)	自由行動(日本人学生と)	
11月6日(火)	武漢へ	

2-4. プロダクツ（成果物）

前述の課題の、自己紹介書、日誌、写真を集めて最後に、各人一人ずつの研修日誌を作成する。

3. 研修に対する評価

3-1. 武漢大学生アンケート

研修最終日11月6日回収、参加者9名中7名が提出する。以下は集計結果（コメントに関しては原文のまま、下線は筆者）である。

I 研修目標に関して

1. 「踊る国文祭2007」を通して、いろいろな活動に参加できましたか。

大変よくできた: 3名 よくできた: 4名

- ・ ボランティア活動をして伝統行事の魅力いっぱい感じた。
- ・ 今回の国文祭により、いろいろな活動を体験させていただいて、日本文化に対する認識を深めることができました

す。

- ・「踊る国文祭 2007」は人々の力を集めて一つより強いパワーになるような企画で、そして日本の魅力、伝統文化をアピールするための古い行事だと思うので、よくできました。なぜ「大変」を選ばないかというと、初めてそういうイベントに参加させていただいて、間違えたところもあって、時々うまくできないこともありましたが、今後は私たちももっとがんばります！

2. たくさんの日本人と出会い、話し合い、考えることができましたか。

大変よくできた：5名 よくできた：1名 ふつう：1名

○誰との出会いが印象に残りましたか。（複数回答あり）

ホームステイの家族(前半)：6名(後半)：5名 大学生：5名 高校生：1名

○どんなことが印象に残っていますか。

- ・ホームステイの家族と日本の大学生のみなさんはとても親切で、やさしくて、思いやりがいっぱいある人です。
- ・ホームステイ先の生活はすごく印象的だった。いっぱい親切なもてなしを受けて、日本の旅へ何の心残りもしないよういろいろなところにつれてもらって、体験させてもらって、日本人への親近感がいっぱい湧いてきました。
- ・前半の家族には70代のおじさん、40代のお父さんとお母さん、10代の息子さんと娘さんもいるので、日本の各年齢層との交流ができた。それに、大変田舎風の生活なので素朴な感じが印象深かったです。
- ・前半のホームステイ先は美馬市市長家で、日本や中国の未来について真剣に話し合っただけで印象深かったです。
- ・今の高校生が何を考えているのか、わかってきた。ホームステイ先の家族の親切さと思いやりを感じた。
- ・非常に友好的だった。

3. これまでの日本との関係を深く考えることができましたか。

よくできた：7名

- ・民間の日本人が交流したい気持ちがわかった。民間と政府は別々、どんな国でも、民間において、やっぱり親切な方が多い。
- ・やはり中国に行ったことのある日本人と話しやすいだと思います。ですから、互いの国に行って、当地の人と話すことが一番です。
- ・各年齢層とも自分的な時代状況があるので、それぞれの考え方が違います。しかし民衆なら、友好交流の期望を持っている人が多いに間違いありません。
- ・日中関係の歴史は長い。日中関係、医療関係、医療制度について考えた。
- ・いろいろの日本人と出会い、話し合っただけで日本人が中国人にそういうイメージを抱いたのかとわかりました。友好交流は政府とかかわらない、個人それぞれ心と関係します。この活動を通して、今後も日中関係の橋樑になりたい気持ちも出てきました。
- ・この間、たくさんの日本人と出会って、話し合っただけで、一緒に国文祭に参加して、たくさんの思い出ができます。この交流を通して、中日関係についてよく考えることができました。このような友好交流が多ければ多いほど、いいと思います。

Ⅱ 主な活動に関して、満足しましたか？

1. 美馬市の国文祭イベント

① 能楽の祭典 10月28日(日)

大変及びよく満足した：2名 ふつう：3名 あまり：2名

② 吉野川文化探訪フェスティバル 11月3日(土)

大変及びよく満足した: 6名 あまり: 1名

③ 映像フェスティバル 11月4日(日)

大変及びよく満足した: 6名 ふつう: 1名

2. 徳島県国文祭 閉会式 11月4日

大変及びよく満足した: 7名

3. ホームステイ 前半 10月27日～29日

大変満足した: 6名 ふつう: 1名

4. ホームステイ 後半 11月2日～4日

大変及びよく満足した: 7名

5. 徳島・鳴門旅行 10月30日～31日

大変及びよく満足した: 7名

6. 徳島大学学部訪問と 城ノ内高校訪問 11月1日(木)

大変及びよく満足した: 5名 ふつう: 1名 全然しなかった: 1名

7. 徳島大学学生との交流会 11月2日(金)

大変及びよく満足した: 7名

○ 活動の中で一番よかった活動はどれですか?そしてその理由は?

<美馬市でのホームステイ生活:5名>

- ・ いっぱいもてなしうけて、お客を大事にする日本人の親切さに感動した。
- ・ 本人の生活を身近に感じ、貴重な体験、そして大切な思い出になりました。
- ・ 前期のホームステイは日本の年よりも成人も子供もと交流して、各年齢層の考え方や中国に対するイメージを
了解した。それに、真実な日本の田舎生活を体験して、素朴な暖かい心を感じた。後期のホームステイ生活は、
60代の人たちだったが、着物や茶道など伝統文化を勉強し、年寄りの目から見る中国、日本を了解した。
- ・ 日本の方とよく交流できましたし、日本人の生のままの生活を体験しました。そしてホストファミリーに大変お世話
になって、とてもありがたいと思います。
- ・ 日本人の日常生活を体験できた。

<日本人学生との交流:2名>

- ・ 年が近いし、考えていることも一緒なので話しやすいです。
- ・ 日本の若い人の考えを教えてくれた。

<徳島・鳴門旅行:1名>

- ・ 日本の文化を深く接触した。

<歯学部への訪問:1名>

- ・ 徳島大学歯科学の教育、自分の人生に新しい認識ができた。

○ 活動の中でよくなかった活動はどれですか?そしてその理由は?

<能楽の祭典:4名>

- ・ 外国人として私は日本の伝統文化に興味を持っているから、その能楽を見たかったんです。けれどもその日は
ずっと忙しかったから、最後まで見られませんでした。残念です。
- ・ あまり観賞することができなかったのです。
- ・ ボランティアの活動だけ体験しました。日本人との交流もあまりできなかったし、能楽の模範演技も見ません
でした。

- ・ 午後のボランティア活動のため、能を見ることができなかった。

Ⅲ 全体を通して考えたこと、感じたこと、疑問に思ったこと、

意見・苦情をお書きください。

- ・ 日本人は伝統文化を大切にしている。
- ・ 規則を守る意識が強い。
- ・ 日本も中国も歴史の流に沿って発展してきた国だから、似ているところ、共通点が多い。
- ・ 日本人の中国や中国人に対する知識はまだ少ない。・人間だったら、必ず心が通じている。
- ・ 日本人の若者たちの受けた教育の中、歴史知識が少ない。特に中国に関すること。
- ・ これからは若者の世代で、国際的な世界になるので、中国人も日本人ももっとも視野を広げて知識面を広くしたほうがいい。どの国でも毎日発展しているので、同じ目で見てはいけない。
- ・ やはり同じ大学生だから、徳大の学生と話しやすいで、楽しかったです。ところが、時間は短くて残念でした。自由活動の日にもう一回日本人学生と会って話すことができてすごく嬉しかったです。また一緒に話し合いたいです。ボランティアも大変有意義な活動ですが、せっかく中国から日本まで来たので、日本人とゆっくり話し合いたいです。今回は活動が多くて、みんなとの交流は慌ただしくて物足りなかったなあーと思っています。
- ・ 田舎というのに、実は実にすばらしいところで、まほろばのすみよい町だと感じた。空気がおいしく、星もいっぱい見られることはたぶん大都市に住んでいる私たちは想像できなかった。中国の農村と違ったイメージが強かった。日本人の親切さあらためて感じた。何とも言えないほど感動した。伝統行事は魅力的で、阿波踊りは女がしなやか、男は豪放で、県民性も反映するほど面白い行事だ。
- ・ ホームステイを通して日本人の和風と洋風のまじった生活に気付いた。でも段々洋式化にされていても、ほとんどの日本人は寝室を和風にする。日本人の親切と微笑にすごく印象残っていた。何でもやさしい、家族の雰囲気もなごやかで、田舎というのに文字通りまほろばのすみよい町だ。
- ・ 国民文化祭は日本の伝統文化を守るために、まず伝えることなので、藍染、阿波踊りなど、人々に参加してもらうということで行われた。段取り決めてまじめに進行することで日本人の力をいっぱい集めることができた。パワーを感じた。
- ・ 徳島大学の風情と文化。日本全国各地の文化を体験できたらなお良かったです。

.....

3-1. ホームステイ受け入れ家庭の評価

前半 6 家庭（2 名の組が 3 家庭、1 名が 3 家庭受け入れ）、後半 5 家庭（2 名が 4 家庭、1 名が 1 家庭受け入れ）の計 11 家庭中、アンケート回収ができたのはそのうちの 7 家庭であった。

今回は、ボランティア活動と同様、受け入れ家庭の募集と留学生の割り当てを美馬市教育委員会にお願いした。ホームステイは全家庭から、うまくいき満足したと回答を得ている。見た目も日本人と変わらないことや、日本語力の高さと日本に対する知識を高く評価している。

また、前半の家庭は、1 日自由行動の日があり、それぞれ家族と小旅行や仕事の手伝い等で交流の機会を持つことができたが、後半はイベント活動の後の宿舎的な役割が大きく、留学生は疲れていたため交流があまり持てずに残念であったという記述もあった。

特徴的な意見として、中国人に対する既存のイメージが大きく変わったというものである。それは、これまでに出会ったことのない大変流ちょうな日本語を話す、見かけは全く日本人

と変わらない学生と、彼らと日本語の出会いやこれからの夢を聞く中一方で、また彼らが抱いた様々な質問に答える中で、かなり深いレベルでの互いの文化について考える対話ができたと驚きと満足感があつたことも述べられていた。今後もこのような形で留学生を受け入れたいとの要望も多かった。

3-2. 高校生との交流活動及び評価

高校生は12、3人のグループに1人の留学生が45分さらに次のグループで45分という形での話し合いを行った。高校生側は異文化理解及び国際理解教育活動の一つとして行い、事前に教師の指導のもとに、中国人学生への質問を各人作っておくことが要求されていた。当日は、二つの教室に分かれて、留学生を取り囲む形で着席したが、やはり遠い位置の高校生は質問しづらいことや、留学生にも多くの視線にさらされているといった感があり、最初はなかなか質疑応答や会話には至らない様子が観察された。留学生からの不満の理由はこの点であろう。

特にアンケートをとるということはせず、グループになった留学生に対して寄せ書き風のコメント記述をお願いした。ここでの感想は、歴史や地理でこれまで学んできた「中国」のことを実際に「中国人」から「流ちょうな日本語」で説明を受けたこと、また自分たちの質問に答えてもらったことに対するお礼や感謝のことばが書かれていた。また「中国」がより身近になったうれしさや、自分たちの外国語能力(英語)が彼らの日本語力以上になるのだろうかという疑問、さらには中国をはじめとして外国へ行ってみたいという希望等も述べられていた。

3-3. アンケートを通して

様々な活動の中で、満足度の低かった「能楽の祭典」は、受付等の仕事は終日あり、じっくり見ることはできず、この結果となった。中国で既に能に関して学んでいたこともあり期待が大きかったのであろう、また市の職員との共同作業をどのような立場でどんな日本語を使って行えばよいのかという、手探りの状態でコミュニケーションをとっている様子もうかがえた。

全体を見る限り、多くの反省点及び改善点はあるものの、研修目的の「国民文化祭を通して、多くの日本人と交流をしながら、自分と日本語、日本との関わりを考える」ということがおおむね達成できたように考える。

4. 日本人学生との交流

4-1. 活動の流れ

交流会に参加する学生を募集し(注6)、22名の参加が得られた。その中の数名に事前に集まってもらい、当日の交流の内容、方法そして司会等を検討した。

- 2 好きなものは？
- 3 嫌いなものは？
- 4 困っていることは？
- 5 したいことは？
- 6 卒業（修了）するまでにしたいことは？
- 7 将来やってみたいことは？（仕事・趣味）
- 8 最近の一日のスケジュールは？
- 9 これからの日本と中国の関係は？
- 10 この交流会であなたが一番話したいことは？

☆日本人学生は、あなたが一番好きなお菓子（食べ物）を持ってきてください。

4-3. 交流の経過

当日は、全員でのアイスブレイキング活動後、5 グループ（雪・月・花・星・宙）に分かれ話し合いと発表に向けてのマップ作成に取り組んだ。マップ作成中に話した内容はグループに1台の当てられたパソコンに記録した。入力された内容から、前述のほぼどのグループも前述の質問項目を中心に話を進めているが、グループによっては一つの項目にしぼって深く話し合っている様子もうかがえる。その中で、中国と日本の彼らが感じている「共通点」と「異なる点」を出し合うことができたようである。グループ発表後、互いに知っている日本と中国の歌を合唱し、また互いに持ち寄ったお菓子を食べて味の比較を行い、交流会は終了した。

4-3-1. 中国と日本—共通点と異なる点

ここでは、宙（そら）組のマップを提示する。

共通点

- ・ マンガ、アニメが好き
- ・ お茶が好き
- ・ 暇な時間の過ごし方が 似ている
- ・ お互い真面目
- ・ 学校生活で
一番大事なことは勉強
- ・ 朝が弱い
- ・ 塾にみんな通う
- ・ 方言がある



中国と日本(宙組)

異なる点

- ・ 日本人の学生はよくバイトするが
中国人はしない
- ・ 日本人は生の食べ物が好き
- ・ 日本のお茶は中国のものと違って
砂糖が入っていない
- ・ 日本人は曖昧な人が多い、
中国人ははっきりした人が多い
- ・ 日本の学生（特に男性）はおしゃれ
- ・ 中国では男っぽい女性が人気
- ・ お昼ご飯のときなど日本の学生は男女が別れるが中国の学生は
わけない
- ・ 日本は方言でも全くわからないということはないが、中国の方言は別の土地の人に通じない

4-4. 武漢大学生のコメント

11月2日には、9名全員が日誌に以下のように記述している（原文のまま記載、下線は筆者）。

- ・ 今は日本人大学生と交流しました。みんなは自分の好きなお菓子を持ってきて、話しながら食べます。とても楽しかったです。私たちは「宙」組です。三人の日本人学生がいます。みなさんは中国人と日本人の同じ点と異なる点をのべました。大変勉強になりました。
- ・ 今日朝十時から、徳島大学の学生さんと交流した。昨日の高校生との交流より、今日の大学生との交流はずっと順調だった。徳大生といっぱいお話ししたり、一緒に自分の持ってきたお菓子を食べたり、最後に一緒に日本と中国との共通点と相違点をまとめて発表した。とても楽しい時間をすごした。
- ・ 武漢大学の口腔医学部はオランダの奈梅津大学と友好大学なので私は中国とオランダの学生の交流活動に参加したことがあります。でも、外国人として交流会に参加するのは初めてです。日本語が全然できないので心配しました。でも、幸いのは同じチームの日本人はできるだけ英語で私と話しました。だから、とても楽しかったです。中日関係について相談する時、私と日本の学生はそれぞれの意見を言いました。そして、日本の学生に中国の現状を紹介しました。これは中日の外交に正しくていいやり方だと思います。私たちも日本の大学生の生活、勉強、文化などのいろいろなものを勉強しました。当然、日本語科の学生にとって日本語も練習しました（中国語で記述日本語訳）
- ・ 日本の大学生はそういうイメージか、と自分の目で確かめた。いっぱい話し合って若者同士だから趣味など結構合っていた。写真もいっぱい撮った。私は普段あんまり手を「V」の形にしないけど、今日は盛り上がってついみなさんと一緒に「V」にしちゃった。おやつタイムも楽しくて、食べることに集中して話すのも忘れちゃった。今日の大学生さんはみんなすごかった。中国について、とくにアジア研究をしている学生さんもいたので、話したらすぐわかってくれて、うれしかった。発表の時に私が、四年生の先輩（自分はそう思わないけど）だから指名されて緊張しながら、がんばって話したが、やっぱりおちつかなくて、これからもそういうような訓練が必要だと思う。
- ・ 徳島大学に招待されて、いろいろな所につれてくれましたが、今日やっと徳島大学の学生と会えて、話できて、とても楽しかったです。やはり年が近いので話しやすいです。私は星組で、同じグループの人はみんなあかるくて中国、日本のことについていろいろ話ができ、発表も大成功だったと思います。ほんとうまだいろいろ話し合いたい。一緒に遊びたいですが、今回の滞在時間が短くて残念です。また中国でみなさんと会いたいです。
- ・ きょうは日本人の大学生と交流した。交流というより、友達のようにお菓子を食べながら話したと言った方がいいと思う。私たちはグループに分けて質問したり、討論したりした。一番多く話したのは両国のおいしい食べ物と若者の好きなタレントだった。食べ物はたしかに各自的な特色があり、異なっているところが多かった。タレントになると、特に日本人のタレントは中国でとても人気があり、日本とほぼ同じく話題になっている。今回の交流でもう一つおもしろいことは中国人の学生も日本人の学生も自分の好きなお菓子を持ってきて、食べながら話すことだ。いろいろな種類のお菓子は女の私にとって、大魅力だ。日本人の学生たちも中国のお菓子にとっても興味があり、写真を撮ったり、日本のと比べたりした人もいる。きょうの交流は今まで体験した学生との交流の中で一番圧力のない、考えたことを隠すことなく、素直に相手たちに教える交流だった。
- ・ 今日はすごく楽しかった。午前は徳島大学の学生さんとの交流会に参加した。が、交流会というより、茶話会みたいだった。みんなは自分が好きなお菓子を持ってきて、食べながら、話し合った。同じ世代だから、話がとてもあって、すごく仲良くなっちゃって、今後は一緒に遊びに行こうと約束した。楽しみ！

日本の学生さんに中国のことを伝えて、また彼たちに日本のことを教えてもらって、よかった。最後の時、みんな一緒に Kiroro の「未来へ」を歌って、そして私たちは中国版の「未来へ」とテレサ・テンの歌を日本の友人に歌ってあげて、クライマックス達した。これからこのような交流を続けていきたい！

- ・ 今日徳大の大学生と交流して、とても楽しかったです。みんなはたくさん話し合いがあって、昨日の高校生とぜんぜんちがって、話に花が咲きました。そして、〇こさんに出会って、中国語に興味を持っている女の子です。中国語がお上手です。とても感心しました。
- ・ 前の友達(2006年に武漢を訪問した学生の一人を指している。)と会ってすごくうれしかった。いろいろと話せなかったが、気持ちくらい伝えられると思う。また連絡してね(^.^)お願い～

4-5. 日本人学生のコメント

参加者 22 名中 14 名の自由記述のコメントを得た。14 名とも交流が大変楽しかったことを述べている。さらに、武漢大学学生の日本語力を高く評価しており、また是非武漢の地を訪れたいという希望もあった。そのうちの二つのコメントを挙げる。

- ・ 最初はむしろ「日本」や「中国」といった国家を意識してしまうのではないかと思いましたが、個人レベルではとても楽しく接する事ができました。文字や音楽などで話題が広がったので楽しかったです。まずコミュニケーションをとって、分かり合おうとする気持ちが大事だと思います。(3 年男子学生)
- ・ 中国と日本はテレビなどで仲が悪いように言われていますが実際交流をすることで、そうではないと気づかれます。少子化、環境問題など、共通の問題を抱え、隣国であることは大変親近感を抱くと共に、打開策にもつながるように思います。協力して解決していきませんか。またお話しください。(4 年女子学生)

4-6. 日本人学生の日誌へのコメント(研修終了後)

武漢大学学生の日誌全体を読んで最終コメントを書く作業を 12 月以降に、交流会出席者に対して依頼した。参加者のうち 7 名が応じ、各人一冊ずつ 9 名の日誌が完成した。コメントの内容は、武漢大学の学生の体験に対するものさらに、日本語を書く能力と表現力のすばらしさ、交流会での楽しかった思い出、そしてメール等のやりとりをさらに復活させて連絡を取り合おうというものも、最後に、もう一度日本あるいは中国で再会を約束するものもあった。彼らは、研修終了後にもう一度日誌を通して学生同士の「交流」を行ったと言える。

5. 考察

5-1. 交流活動の種類と評価

交流活動 表 4

交流	対象	活動	場	時間	留学生の役割	継続性
①ホームステイ	家族 (子供～老人)	生活一般 会話	家庭 地域	2-3 日	家族の一員	△
②高校生	15-16 歳	会話	教室	45 分×2	主導	×
③大学生	20 歳前後	会話	教室	2 時間+α	対等	○

研修において四つのタイプの交流活動を実施したが、そのうち直接参加者に評価を得ることのできた三つ、①ホームステイ②高校生③大学生を取り上げ考察する。これらの交流を構成要素で比較したものが表 4 である。研修の中に組み込まれたものとして、参加者はその枠

組みのもとで活動を行った、この表以外に参加者の満足度という点では次のように考えられる。①ホームステイに関しては家族の一員あるいは客として家庭に身を置き生活する。方法の分からないことや疑問に思ったことなどを質問する。②や③学校教育の中で実施される交流のタイプとは全く違うものと言える。今回は、日本語（英語）力及び日本に関する知識があったことで大きな問題もなく、また日本人の生活や心を知りたいという気持ちそしてそれに答えようとする家族らの働きかけによって、満足度が高かった。

それに対して、②の高校生との活動では、グループの中で自らが主導的に、中国に関する質問に答えたり、質問がない場合には逆に質問をしたり説明をしたりという主導的な講師の役割が要求された。また 12-3 人が口の字に囲む真ん中に座るような、皆が等距離で顔を見ながら話すという場ではなかったことや、相手の高校生には意欲的でない様子も感じられた。参加者の中に、教育の枠組みの中で受け身の存在となったため、満足度にはばらつきが見られる結果となった。

③に対しての評価が高かったのは、参加者が互いに交流をしたいという意欲を持っていたこと、同じ大学生という立場で気を遣わずに自由に一番知りたいことを話せたこと、グループが 5 人から 6 人という小サイズで、一つの机をメンバーが囲み対面した形で行ったこと等も理由として挙げられる。また、参加者に対して何が要求されていて最終的に何をグループでしなければならないかが明確であったこともあるだろう。

満足度が低い活動に関しては、これらの内容は具体的な改善点と検討しなければならない。しかし、ここで留意しなければならないのは、満足度によってこれらの優位さを決めるのではなく、まずそれぞれの活動にそれぞれの意義があること、さらに研修という全体の流れの中で、目的や内容の違った活動が存在することを実施者と参加者が認識することである。

例えば、高校生の多くは、中国人と日本語で話すことは生まれて初めての体験であったことなどから、うまくいかなかったという点で満足度が低いとしても、体験として大きな価値を持つと考えられる。また、ここから彼らが外国語能力の必要性を感じたとしたらそれも大きな教育の目標となり得る。

交流活動の中では様々なコミュニケーション（言語・非言語を使って情報を交換するとともに、情緒的なもののやりとりも行われた）が行われる。現実のコミュニケーションの場では、成立・不成立、また様々な感情が引き起こされる。そういった点からも、参加者自身に振り返りといった評価の場を与え、さらにその原因を考えてもらうということが、教育の枠組で行われる交流活動ではより可能だろう。

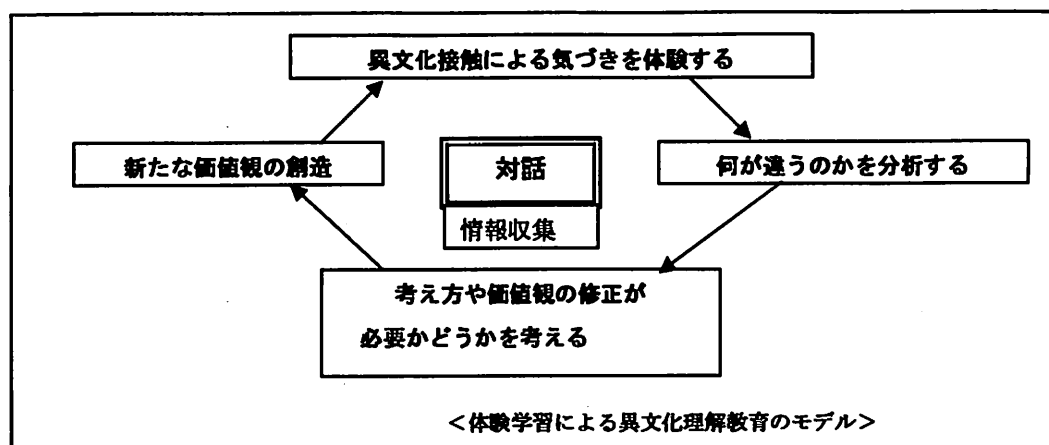
5-2. 交流活動の意義と目的

最後に、交流活動を教育の場をしてとらえたときの、意義と目的に関して考える。これらの活動の第一の目的は「仲良くなる」ことだけではない。結果として仲良くなったということ以外に、本来の目的を一つのモデルをによって提示する。それは、自分と違うものとの出会い「異文化接触」の場を設定し、そこでの個々の気づきを促すことである。気づきから、何が違うのかを分析し、自らの考え方や価値観の修正が必要なのかどうかを考える。その環境の中で、他者との共生のために新たな価値観を創造し身につけるという流れを持った体験学習といえる。情報収集と話し合いによる相互作用を行う「異文化理解教育」と言い換えてもよいだろう。

ある一定の文化に対する知識を獲得するのではなく、この体験学習を繰り返すことによって、異文化に対する態度あるいは取り組み方を学ぶと考えるのである。このように環境や相手に合わせて、自文化と他文化を調整していくことをここでは「異文化コミュニケーション能力

(Global Literacy)」とする。

外国人との話し合いによって、まず様々な違いを認識する。そしてその違いを感じた自分の考えを確認していくという作業は、関係作りのための「会話」ではなく「対話」と定義されよう。他者と向き合いながら自分を問い直し、自己を主張していくという「対話」は、今後のコミュニケーション活動を考える上でも大切なものを含んでいる。



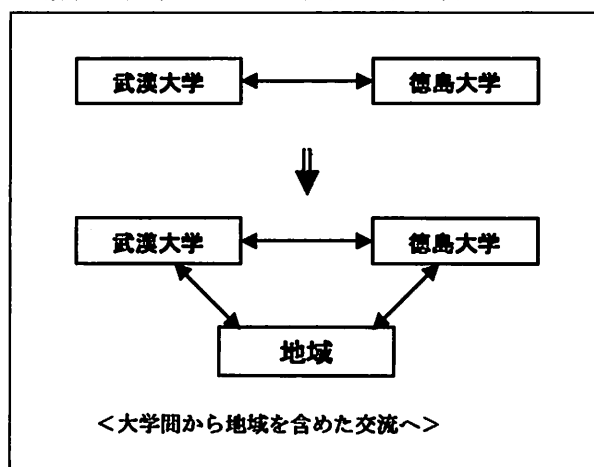
交流活動の意義は、この循環型の体験を積み重ねることにより、「異なる文化に属する人々とコミュニケーションしながら生きられること」ともいえる。

6. むすびにかえて

今回の研修では、大学間の連携協力に加えて地域との協力をということにも考慮した。研修参加者の関心は大学とのつながりだけでなく、日本そのものにもあることを前回の調査で得たからである。言い換えれば、留学生センターがその取り組みの一つである「地域の国際化」に対して、武漢大学の学生の力を借りたともいえる。また、海外との交流を通して地域社会に変化を起こすことができるかというのも今後の課題の一つでもある

これまでの、大学間だけの研究・教育に関する情報の交換のみならず、大学を含んだまさにその地域を巻き込んだ人材交流が今後より活発になることが予想される。

研修参加者が得たものは、体験によって得られた日本及び日本人に関する知識や感覚とこれまで持っていた日本に対する価値観を再構成するきっかけであろう。一方の日本人にとってもやはり同じく、交流という体験を通じた異文化に対する気づきであろう。いずれにしても、長期の留学と違って、短期の訪問研修にも実施方法とその内容によっては、より広い国際交流のネットワークを作る重要な役割があると考ええる。最後に、今回の研修に関わった三者それぞれのコメントを提示し、むすびとしたい。



○ホームステイの家族の記述

・「最近の報道（偽装、模倣等）で中国に対して良くない感情や偏見を持っていた。またそう

である人も少なからず、いると思うが、彼等と交流を持ち、日中の架け橋になりたいと言う心に触れ感銘した。」「できるだけ多くの学生を招待してください。このような活動によって、私たちとの交流も盛んになると思います。」

○武漢大学生（女性）のことば（一研修を終えて一日誌より）

- ・『日本と言ったら東京だ。』私は以前このように思っていましたが、今度の「武漢大学・徳島大学・文化体験研修」活動を通して、そのイメージが変わりました。私たちは「阿波の国、文化ふれあい、ゆめ、ひと、みらい」をテーマとし、徳島県を舞台に開催した国民文化祭のボランティアとして、参加しました。阿波踊り、藍染めを始め、庶民の伝統文化に身をもって感じました。

また、この間に美馬市でホームステイをしました。本当に感心しました。楽しい日々を送りました。徳島、特に美馬市民の優しさ「お接待精神」を感じました。これも、日本人は小さいことをちゃんとして、みんなで大きな感動を共有することなのです。今回の活動を通して、別の日本を分かりました。栄えの表れに庶民文化と人の団結が分かりました。それはこの短い時間でもっともあり得ないことと思います。以前から日中友好交流のためにがんばりたかったのですが、いったいどうすればいいのか、考えられていませんでした。今は小さいことをすればいいと思います。たとえば周りの人に中国語を教えることからです。今からもっとがんばります。」

○日本人学生（男性）の上述の学生への最終コメント

- ・「今回の来日で、日本の都会でなく地方の文化や人々に触れ合って、今までとはまた違った日本を感じてもらえたことが一人の日本人としてうれしく思います。私たちはたった一日のほんのわずかな時間しか交流できませんでしたが、国文祭でのボランティアやホームステイで色々な人とお話しする機会があったようですね。日本人の優しさに感動したと書いてもらいましたが、私も武漢へ行った時にとっても親切に色々な所を案内してもらったことを思い出しました。アニメや漫画、音楽も日本の文化ですが、祭りや能楽や歌舞伎、落語などの伝統文化も面白いものが一杯あります。私も詳しくありませんが、もっと伝統文化に興味を持ってもらえたらうれしいです。徳島以外にもそれぞれ文化があります。私は〇〇出身ですが、ここにも面白いものが一杯あります。また日本の色々な地方にも来てくださいね。私も中国の色々な所に行くつもりです。」

特に若い世代の人材が多く、異文化に触れ、自らの価値観を状況に応じて変えてける手がかかりつかめるような「交流」の場を設定すること、そしてそこで人と人との「対話」がなされること、このような活動の実施に向けて
今後も大学間そして地域との協同・連携を図っていきたい。

付記

本研修は平成 19 年度財団法人中島記念国際交流財団助成による留学生地域交流事業助成金および平成 19 年度徳島大学学長裁量経費を得て実施された。

<参考文献>

- ・ 榎田勝利 (2007)『国際交流の組織運営とネットワーク』明石書店 国際交流・協力活動入門講座Ⅱ
- ・ チャドウィック Chadwick F. Alger/吉田新一郎編訳 (1996)『地域からの国際化—国家関係論を超えて—』日本評論社
- ・ D.W. ジョンソン/R.T. ジョンソン (2003)『学生参加型の大学授業—協同学習への実践ガイド—』玉川大学出版部
- ・ Gehrtz 三隅友子・上田和子 (2002)「双方向学習の試み—交流セッションから見えるもの—」国際交流基金日本語国際センター紀要第12号 P. 71-86
- ・ Gehrtz 三隅友子・曾我部朋子 (2006)「日本語教育を通じた大学間の協同・連携を考える—2006年武漢大学出張報告—」徳島大学留学生センター紀要第2号 P. 31-49
- ・ 毛受敏浩 (2003)『草の根の国際交流と国際協力』明石書店 国際交流・協力活動入門講座Ⅰ

注1 徳島大学留学生センターでは、平成19年度財団法人中島記念国際交流財団助成による留学生地域交流事業助成金を得て、徳島県美馬市と連携・協力し「異文化交流による地域活性化プロジェクト（まほろば国際プロジェクト）」を実施した。この訪問研修は、このプロジェクトの中期に実施したもので、全体をまほろば国際プロジェクトとし、特に武漢大学の研修に関しては「まほろば武漢プロジェクト」と名付けた。美馬市は「四国のまほろば 美馬市～だれもが住みたくなるまちをめざして～」を将来像としている。

注2 調査では、ほぼ全員が日本への留学を考えていること、また専門以外に日本語と日本人の心理と日本の国情、日本文化・歴史を学びたいこと、旅行をはじめアルバイトや仕事を通じて日本人と友達、知り合いになりたいという要望が得られた。徳島大学留学生センター紀要第2号 (2006)「日本語教育を通じた大学間の協同・連携を考える—2006年武漢大学出張報告—」で詳細に報告している。

注3 研修の中では日本語授業を行わず、使う場のみを提供した。

注4 国民文化祭は日本国内のうち毎年一都道府県が選ばれ、全国の文化芸術活動を1週間で集約して行う最大イベントである。2007年は22回で徳島にて開催された。この時期には、県内の総ての市町村が様々なイベントを企画実施することにより、県内の文化活動の活性化及び観光事業を強化するという目的がある。この時期に訪問研修を行うことは、研修のために様々な文化体験を用意するのではなく、自治体が開催する催しに参加できるという利点とさらに県外からも多くの芸術家や観光客が訪れ、より活気のある徳島を紹介できると考えた。そのうち美馬市では、日本全国から関係者が集まった「能楽の祭典」、また「吉野川フェスティバル」では、藍染体験・脇町旧家での茶道体験、さらに本来祭礼の際しか登場しない「山車」を引く体験も可能となった。「映像フェスティバル」では、国内から分野別の映像コンテスト入賞作品の上映等、この時期のみしか参加できないイベントが催され、またそれらを武漢大学の学生が体験することができた。

注5 2007年1月に同じく韓国の協定校慶北大学より10名の学生を短期研修で受け入れの実績がある。

注6 参加学生22名の内訳は、男子5名・女子17名／工学部2名・薬学部1名・総合科学 部19名【自然システム1名・アジアコース10名・国際文化コース3名・パンダクラブ・中国文化のクラブ5名】／2年生10名・3年生5名・4年生7名、であった。2006年の武漢訪問者はこのうち、4年生の3名である。

注7 募集に関しては、総合科学部の葭森教授、荒武准教授に依頼した、ゼミ生及び中国文化、中国語に関心のある学生さらには、国際文化コースで外国に興味を持つ学生に広く呼びかけてもらった。また両教員には、交流の方法や内容についても示唆をいただいた。また参加学生の中には、2006年に武漢へ行った学生が含まれており、あの時に受けたもてなしを返したいという思いがあったことを語ってくれた。



11月4日 脳町劇場オデオン座前にて
研修参加者と市職員